

オトナ 純愛

対談 & 立ち読み

八人の作家たちによる

普段着スタイルの

にぎやか対談集!



オトナ
純愛

—amour platonique—

オトナ純愛 [対談・立ち読み]

【記者】マーベラス=雷太

【対談者】アザトー・鋼雅 暁

【表紙イラスト】七ツ枝 葉

【装丁】スタジオ飄

※この作品は横書きでレイアウトされています。

※この作品はフィクションです。実在の人物、団体、事件とは一切関係ありません。

※製品版では縦書きの作品も、今回横書きで表示されています。

※立ち読みと製品版で内容に変更がある場合もございます。ご了承ください。

※こちらに掲載されていない作家さんもいらっしゃいます。そちらもぜひ、お楽しみに！

【目次】

- ・まりの×アザトー
『タマさん、拾いました。』立ち読み版

- ・KEY×アザトー
『馬酔木と満天星』立ち読み版（先行公開）

- ・セツ枝 葉×アザトー
『まちあい』立ち読み版（先行公開）

- ・栗生慧×アザトー
『好きだから別れます』立ち読み版

- ・GALA×アザトー

- ・鋼雅 暁×アザトー
『恋御籤』立ち読み版

- ・紅月 実×アザトー

- ・アザトー×鋼雅 暁
『恋味コロッケ』立ち読み版

◇企画主ご挨拶◇

ほのぼのの作家が描く大人の恋は
やっぱりほのぼののテイスト♡

まりの

『魔界王立幼稚園ひまわり組』で書籍デビューを果たしたまりのさんが、電子書籍の世界に殴りこみ？

いえいえ、ほのぼのを得意とする彼女ですもの、大人の女性を書かせてもほのぼのした優しいお話なのです。

しかし対談ではウェットのきいたやり取りで相手を翻弄する一面もあったり、小悪魔的な魅力を味わえるぞ☆



対談オトナ純愛

まりの×アザトー

アザトー「では、よろしくお願いします♡」

まりの「よろしくお願いします〜。」

アザトー「最初に、これはみんなに聞いているんですが、『オトナ純愛』に参加してみてどうでした？」

まりの「まず面白い企画だなと思いました。次に、これまたみなさん仰っていると思うのですが、難しい題材だなと思いました。純愛の基準は千差万別だと思うので。ひどく子供っぽいものになってしまった感はありますが、参加させて頂いて本当に嬉しかったです」

アザトー「今回はずいぶんとほのぼのした話でしたが、いつもこういう作風ですか？」

まりの「書籍のほうでわかると思うのですが、ほのぼのの作家（笑）と呼ばれているのでwww 私は個人的にはまじめに描いてもゆるいという。というわ

けで大概いつもこんなかんじですね……あ、いや、SFとかは硬派な感じで書いてる時もありますよ！」

アザトー「硬派なのもかっこいいよね」

まりの「ありがとうございます。アザトーさんみたいに色っぽい話も書いてみたいのですがなかなか。(BL書いてるとは言えない)」

アザトー「俺はリアルのほうが色っぽいですよ〜〜〜←盛った」

まりの「ほう…リアルが♡」

アザトー「あう、色っぽい…とお！ この話はおいておいきまして、すでに書籍デビューをされているのに今回の企画は電子書籍、だったわけですが、そこに何か葛藤とかはなかったですか？」

まりの「電子は憧れだったんです！でも勝手にわからず戸惑いましたが楽しかったです」

アザトー「今回は扉絵も自分で描いたということで、可愛らしく仕上がっていますよね」

まりの「元々絵かきが本職だったんですよね、実は。楽しかったです。素敵なロゴもデザインしてただけて」

アザトー「自分の作品を自分で絵に起こすというメリットとデメリットを伺ってもいいですか？」

まりの「そうですね、キャラクターのビジュアル、作品のイメージというのは読み手それぞれで違うと思うのですよね。本人が描くとあくまで自分の中のイメージ。キャラクターを描いてよかったのかなとも思いましたが、それも含めて届けられるのがメリット。デメリットはイメージの押し付けになっちゃうところかな」

アザトー「なるほど、読者の想像力任せにできない感じになっちゃうんですね」

まりの「お任せしたい部分もありますしね」

アザトー「でも今回の表紙、タマさんの正座は俺のイメージどおりだったよ？ かわいいの♡」

まりの「それは良かったです。オトナの女性って歳下とかカワイイもの好きなどころもあるかと思ひまして」

アザトー「大好きです！ 意外と大人のほうが『かわいい』を好みますよね〜」

まりの「『オトナ』を誇大解釈してみた結果『よし、愛でる純愛』もありかなーと思ひまして…あと動物はどうしても外せないというのが『まりの』のこだわりなのです←」

アザトー「そろそろまとめに行きますよ〜。もしも今後、こういう企画が在ったらまた参加してみたいですか？」

まりの「生意気ですが参加してみたいですね。同じテーマでも書き手さんがちがったらこうもいろんな話が出てくるというのは魅力的でした」

アザトー「ほんと、テーマは同じはずなのにね。だから俺も面白かったです」

まりの「まとめ役ご苦労さまです。これもアザトーさんの人徳かと」

アザトー「はい、またの機会にもぜひ参加して～←人徳悪用 本日はお時間ありがとうございました～」

まりの「お声掛けいただいて光栄でした！ありがとうございましたー！」

タマさん、拾いました。(立ち読み版)

【著・イラスト】まりの

「うーん……」

あームカムカする。頭はズキズキ痛いし、瞼が重くて目が開けられない。これって二日酔いだよね、絶対。

今年に入ってこれで何度目だったかな、結婚式。今回は三次会まで付き合いだからいっぱい飲んだよ。祝う方ばかりで、一向に祝われる立場にならないから、財布にも気持ちにも優しくない。正直飲まなきゃやってられない。

ふーんだ、みんないい男つかまえちゃって。

私だってそのうち……とか言ってる間に三十を過ぎちゃったけどね。

そんな事を思ってもぞもぞしていると、妙にベッドが狭い事に気がついた。何かいて寝返りが打てない。

顎に当たる柔らかい毛の感触。自分以外の体温。胸元に当たる寝息。

この大きさはゴンザレス？ ジョージさんやアレックスでは無い。甘えん坊がケージを抜けだしてベッドに入ってきたのかな。

いや、そういえば昨夜もまた拾い物をしたかもしれない。酷く怯えてたから一緒にねんねしようねって、お風呂に入れて一緒に寝たような記憶は臍気ながらあるような無いような。

えーと、子猫ちゃんだったっけ？ でも大きいよね。やっぱりゴンザレスかな。

でもゴンザレスよりも更に大きい気が。それに感触が違うような。毛が少ないし、なんかつるつるしてるよ？

そろりと目を開けて自分が胸に抱きしめているもの確かめた。

「へっ？」

そこにいたのは子猫でも犬でも何でも無いもの。

自分よりも大きな若い男の人が私の胸に顔をうずめて、気持ちよさそうにくうくうと寝息をたてて寝ていたのだ。

昨日は学生時代から特に親しかった友人の結婚式だった。

次々と仲良しグループだった友人は結婚して行き、彼女と私はずっと独身でもいいよねとか言ってたのに、あっさりいい男をつかまえてゴールインですよ。しかも冬にはママになるそうで。

女友達はお洒落にうるさい。毎度同じフォーマルスーツも披露宴に着て行けない。美容院にだって行かなきゃなんない。それに親しいほどお祝いも嵩むわけ。経済的にも心理的にも大きく響きつつ、笑顔で「おめでとう」って言って心で泣いた。

自分で言うのも何だが、私は見た目はそんなに悪くないと思う。歳よりも若く見られるし、それなりにメイクや服装にも気をつけている。大学を出てからずっと勤めてるから収入も仕事上の信頼もまあまああるし、家事や料理だってそれなりに出来る。友達も多いほうだ。但し、年々周囲が家庭に入ってしまう休日など遊べる相手は減ってきたけど。

どうも私は、男性から見ても色っぽい関係になる相手ではなく「友人枠」であるらしい。同性に接するように普通に仲の良い男友達は結構いたりする。勿論恋人として付き合った男がいなかったわけでもないが、親密になればなるほど、どうしてか長続きしないのだ。

最近はずっとばかり焦りも出てきて卑屈になってもいる。

どう考えたって不細工だったり、センスが無かったり、自分で何も出来ないような女達がいい男をつかまえて次々結婚して子供がいて。なのに私はどうしてゴールまでいかないのだろうか。

田舎の両親も親戚も電話してくる度に「早く嫁に行って孫見せろ」と言う。というか……三十の声を聞いた途端に「誰でもいいから」って付くようになってきたのが余計に痛い。

そんな中で呼ばれる結婚式。幾ら友達に幸せになって欲しいと思っても、お祝いのスピーチなんかやりたいものですか。よく「あなたの幸せは私の幸せ」なんて言うけどそんな綺麗な事で済むものか。

二次会、三次会まで付き合い、忘れちゃえとばかりに飲んだのはよく覚えている。居酒屋で頼んだ料理や店の名前も覚えている。酔って足元がおぼつかない私を、心配だから送っていくという周囲に大丈夫だと断って、雨が降ってたから近くまでタクシーに乗ったのまでは。

そしてマンションの前の電柱のところに子猫ちゃんが蹲ってうるうるした目で見上げてたのも何となく覚えているような。雨に濡れて可哀想だなんて連れて帰って……でもその辺は記憶が曖昧。

私には昔から酔うと悪い癖がある。

つい何かを拾って来てしまうのだ。以前看板を拾って……というより盗ってきて、平謝りに謝って返したのを筆頭に、粗大ごみに置いてあったソファ、サドルのない壊れた自転車なんかは周囲を大いに呆れさせた。今はそう困った拾い物はしなくなったが、生き物なんかは放っておけなくて、ペットOKのマンションなのをいい事に、現在二頭の犬、猫一匹を飼っている。今まで拾った子は元の飼い主を探し出したり里子に出したりして来た。残った子もちゃんと躰もして吠えたり噛みついたりしないよう気を使っているし、苦情が来たことは一度も無い。

……これが婚期を遅らせている最大の原因だとわかってはいるのだけど……。

いや、今はそんなことはどうでもいい。

なぜベッドに半裸の男が寝ているのかだ。しかも丁寧に私はそれを抱きしめてるって。

そろーっと手を離しても起きないので身を起こして自分の体確かめる。

私は酔っていたにも関わらずちゃんとパジャマを着ている。二日酔いで気持ち悪い以外、これといった余韻も形跡もないので、何やらいたしていたわけでは無さそう。

まさか私は酔った勢いで人間まで拾って来てしまった？

私だったらありえないと、心の何処かで納得しちゃってる自分が一番怖い。

うーん、どう見ても若いな。下はスウェットを穿いてるが……見覚えのある……上半身は裸。わあ、横を向いても広い肩からきゅっと締まった腰のラインの綺麗なこと。肩甲骨とかセクシー。しかも超イケメンではないか！ 鼻高いよ！ 睫毛長いよ！

「う……ん」

眉根を寄せて動いたので思わずベッドから飛び降りる。叫ばなかった自分を褒めたい。

「もう朝？」

あ、目を開けた。

ベッドの横に途方に暮れて立ち尽くしている私の顔を見て、イケメン君はほんわりと微笑んで身を起こした。寝ぐせで跳ねた少し長めの髪がふわっと揺れる。寝起きの掠れた声と聞ききってない目がセクシー。

あ、なんか今ガラにもなくキュンとした。

いやいや！ キュンってしてる場合じゃなくて！

「久しぶりによく寝た」

くしくしと目を擦って欠伸しているのは、どう見ても人間で。男で。

「あの、どなた様？」

我ながら間の抜けた声で尋ねると、彼は不思議そうに首を傾げた。

「誰って……昨夜拾われた猫のタマだよ」

(続きは製品版でお楽しみください)

膨大な読書量に裏打ちされた

安定感ある文章力

KEY

今回が電子書籍デビュー第一弾となるKEYさん、彼女の最大の武器はジャンルを選ばぬ貪欲な読書姿勢であるが、乱読家という訳ではない。

きちんと一つ一つの作品に真摯に向き合い、噛み砕くからこそ読書に意味があるということをきちんと心得ている。

その読書量は作品にも反映されており、安定感のある読み口が魅力だ。

今回はそんなKEYさんとアザトーという、お母さん作家同士の対談が実現した！



対談オトナ純愛

KEY × アザトー

アザトー「本日は対談、よろしくお願いします」

KEY「まずは企画参加に声をかけていただけてとても嬉しかったです。ありがとうございます」

アザトー「いえいえ♡ 今回のオトナ純愛企画は、参加してみてもいいかですか？」

KEY「書いている最中はとても楽しかったです。いろんなプレッシャーがある中で、正直 書きあがるのかどうかと言うのが一番の心配でしたが、何とか締め切りに間に合った……という安心感というか安堵感というのがまあホントに……(^_^;) 皆さんがどんなのを書いているのかとか、執筆状況がどうだとか、色々な情報交換しつつの中で書いていたので、焦りよりも楽しい気持ちで書けたのが良かったです」

アザトー「お疲れ様でしたな♡ さて、KEYさんといえばなろう掲載中の代表作などからヒストリカルなイメージを持つ読者さんも多いと思いますが、今

作もやはりそういう雰囲気ですか？」

KEY 「当初は、江戸時代後期の花魁の話を書こうと思っていたのですが、同じ企画に参加される GALA さんが同じようなプロットを考えている、と言われたので、それなら、と全く違うテイストにしちゃいました」

アザトー「おお、まったく違う、という現代モノ？」

KEY 「ガッチリ現代ではなくて、イメージとしては第二次大戦 10～15 年後くらいの日 本なんです まだちょっと、古き良き奥ゆかしき時代が残ってる、みたいな……やはり、作品の方向性を固めてる最中に、あおさんとさこさんとお話してて、未亡人とかおじ様とかいいね！って話しになって、そのキーワードぶっこむのに、ギリギリおかしくない時代背景、ってそのくらいかなーと」

アザトー「お友達の助言のおかげですね。KEY さんはそうした創作の友人が多いことで も有名ですが、友人に助けられたエピソードを窺ってもよろしいですか？」

KEY 「今回の企画は、話を聞いてもらえたお陰で描きたいイメージも固まりましたし、助けられてばかりです。相談にのってもらう事もですけど、愚痴聞いてもらえるのっていうのは、本当に大きいです リアルで、特に家族には内緒での活動ですので、わかってもらえる人というのは本当に有難い存在です アザさんにも助けられてばかりです～」

アザトー「いやいや (照)」

KEY 「逆に聞きたいなあ 家族に内緒の人が多く中でアザさんはオープンにしてるけど、いつ頃カミングアウトしたの？」

アザトー「しょっぱなからカミングアウトですよ？ もともと俺が文章書いていたことは 周知だったので、長いお休みの果てに再び書き始めたな、って言うだけのことです」

KEY 「おお、それは凄い…… 私もそれくらいオープンにしてたら、『いいからとっとと 寝て PC よこせや((#°益°))ゴル!!』ってならなかったかもしれない……結局、書いてる自分に自信がなかったから黙ってた訳だけど」

アザトー「さて、ここから、みんなが一番聞きたいであろうデビュー前後の作家の心を聞いてみたいと思います」

KEY 「ううっ……前後の心……って言われても……(^_^;) 意外と、あまりドキドキしてなかったりするんですよね まだ、ちゃんと製品になったものを目の当たりにしてないせいでしょうかね？」

アザトー「たとえば、普段書いているときとは作業的に、とか、心構え的に違ったことって在りましたか？」

KEY 「心構えというか、」

KEY「あ、途中で送っちゃった(^_^;) 隣で子供が奇声を発したもんで(´Д`
;)」

アザヒ「生活感ですなw お母さん作家にはよくあることです」

KEY「スンマセン、明後日が子供の夏休みの宿題提出日なんで、横目で見張り
つつなんで すよ(^_^;)」

アザヒ「あ〜、うちの子は逃亡中で帰りを待ちながら……」

KEY「スンマセン、長男が逃亡したのでちょっと離脱します」

アザヒ「はいな」

(待つこと数分)

KEY「トイレ⇒部屋にこもってDSでYouTube うへへ中だった息子を引きずっ
て机に縛り付けました☆彡」

アザヒ「ご苦労様ですにゃ！」

KEY「こういう苦労をしつつ書いた、ってのが一番の思い出になるのかもしれ
ません…… (^_^;)」

アザヒ「面白いから『お母さん作家』の苦労話に変更〜o 家みたいにオープ
ンだと子供たちの協力も得られるけれど、内緒で書いているとなかなか書
く時間も取れなくない？」

KEY「基本的に、子供の宿題見ながら書いてるのですが、たまに、子供の質問
に答えるよ うとしたときにエロ言葉がぼろりしそうになったことがあります
す(・ω・)ノ」

アザヒ「それはあぶない！ けどよくある〜」

KEY「アザさんとこはそれなりに大きいから……うちまだ小学生だからねえ
(^_^;)」

アザヒ「年頃の娘がいるから、時々冷たい目で見られちゃうよ？」

KEY「あと、(・∀・)ニヤシながら書いちゃってて、子供らにドン引きされる
とか、『お かーさん、なにへんな顔してるのーやだー☆彡』とか言われる」

アザヒ「それで我に返ったら……いやん、恥辱プレイ！」

KEY「目があったとき……(/ω*)」

アザヒ「ああっ！ もう、恥ずかしくて悶えるしかない！←どM」

KEY「私、旦那さんに当り散らす(・ω・)ノ←どS」

アザヒ「それでもKEYちゃんはその執筆環境でクオリティも執筆速度も保っ
ているか ら、子供さんたちの手が離れてからの大活躍を期待している作家
さんなのです」

KEY「ありがとうございます」

アザヒ「そろそろまとめはありますね〜」

KEY「はいです〜」

アザヒ「もしもまたこういう企画があったら、参加してみたいですか？」

KEY「是非、参加させていただきたいです 締切に間に合うようにピシピシ追い立てても かわかないと書けないでしょうが、今回のように仲の良い作家さん方とさらに親密になれるような企画があるなら、と思います」

アザト「なるほど、またいい企画を立てないとな(にやり) それまでに、『子供にばれ ずにニヤニヤするスキル』を身につけてくださいね」

KEY「あうっ・・・(・▽・) ニヤニヤせずにかけるスキル身に付ける!(;´∩`)

アザト「いえいえ、本日は長々とお時間ありがとうございました。宿題の見張り、頑張っ！」

船から見える懐かしい島影に、私はほっと息をついた。

疲れていない、といえは嘘になる。

近くのホテルに宿を求めてもいいだろう。

が、それでも、今日の内に実家に帰るべきだ、いや帰りたい、という帰巢本能を目覚めさせるのに十分な魅力を、故郷の島影は放っていた。

兄の梓^{すき}が亡くなって、既に1年が経とうとしている。私は欧州に絵画の留学中の身であったため、葬儀にも出られずじまいだった。

と言うよりも、葬儀が終わった後に、兄嫁である操^{さだ}さんから、簡素な電報を受け取ったのみだった。

キコクスルニオヨバズ・ベンガクニハゲマレタシ

などと打たれていては、ある程度の成果を得られなくては、逆に帰ることなどできはしないではないか。

そうして私はこの一年間、無我夢中の中で生き、とある展覧会にて最も栄誉ある賞を手にした。一応、凱旋帰国と言っても良いかもしれないが、意気揚々とは到底いかない。

「梓兄さん……」

兄の梓と私は、十七歳も年の離れた兄弟だった。

そこまで歳が離れていると、そもそも兄弟であるという感情も育ち難い。

おまけに、兄の梓は父に似て、厳つくも男らしい容貌をしていた。

日本人にしては背が高く、肩幅も広く胸板もあつい、筋肉質のがっしりとした体躯。

太い眉と濃い唇、鋭い眼差し、高い鼻、発達した顎。

豊かな黒髪をオールバック気味に整えて、何があっても動じない、まるで小洒落た洋画に出てくるダンディなヒーローのように、男ぶりが良い。

対して私はといえば、母に似たらしい。

中肉中背、取り立てて良い体格、という訳でもない。

少年の年齢を超えて声変わりしても、眉は薄く唇も赤く、瞳も大きければ、サラサラした髪が覆う輪郭もたまご型、しかもなで肩ときている。

さらにはとどめに、いわゆる童顔、というやつで、おかげで留学中、何度も子供と間違われたものだ。

兄の梓を一年前に亡くした私だが、実はすでに両親も亡くしている。

まず、私が六歳の時に母がインフルエンザからの肺炎で、次いで九歳の時に

父が、仕事上の事故で亡くなった。両親との死別後、兄は曾祖父が起業した鉄鋼関係の家業を継いだだけでなく、私の親代わりとなってくれたのだ。

遺産である信託などの財産管理も、実直に誠実に、精力的こなしてくれていた。でなくては、外国で、数年間も金に困らず生活していけるわけがない。国の支援制度を受けられたとはいえ、所詮それは、『箔付け』のようなもの。実際にひねり出される金額は、すすめの涙どころか、アリの涙程度だ。実質は、渡航費用だけでなく現地の生活費用もほぼ自腹で捻出せねばならない——というのが、現実だ。

よく、ロマン主義の小説などでは留学生が主人公にすえられ貧乏にあえいだりするが、あの境遇と描写は、当たらずとも遠からず、なのだ。実際、留学中に友人に金を無心され、何枚、念書を受け取ったことか。もしかすると、完成させた絵を見に来いと誘われるよりも多かったかもしれない。

「梓兄さん……」

もう一度、兄を声に出して呼んでみる。

私と兄の梓は、年が離れ過ぎていて、兄弟とも肉親とも言い表せない、不思議な間柄であったと思う。

だからであろうか？

実は、私は兄の死を知らされても、哀しくなかった。

涙すらでないとは、薄情者である証拠だろう。

己の心を深くいぶかしみ、そちらの方が悲しくなったものだ。

兄弟といえども音信不通がつづき交わりが浅くなれば、この様なものになってしまうのも仕方ないことだろう、と自分で自分をなぐさめ続けての帰国だった。

「兄さん……」

それとも、自分で気がつかない、気がつけない、なにかが、心の奥底でブレーキをかけているのだろうか……？

港に降り立ったのは、春先であっても、まだ夕やけには間がある時刻だった。少し歩いてタクシーを捕まえる。

ドアを開け、実家の住所を告げる。了解しました、どうぞ、と促され、キャリーバッグが大きい為ハッチバックも開けるように頼む。面倒くさそうに運転手が降りてきて、荷物をハッチバックにほうりこんでいる間に、私は車内に乗り込んだ。

座席に身を沈めるなり、運転手の好奇心からくる、しつこいおしゃべりが始まった。姦しさから逃げようと、私は固く目をつむる。

途端、私は、十年前のあの日にかえっていた。

*

兄の粹夫妻は結婚して数年経っても、子供が授からなかった。

兄嫁である操さんは、それを密かに嘆いていた。

が、その兄夫妻の関係に、変化が訪れた。

養女を迎えたのだ。

何でも、私たちの父方の遠縁にあたるらしい。親戚付き合いも兄任せであった私は不義理にも、そんな娘がいることすら知らなかった。

なにせまだ、日本が戦争に負けて数年しかたっていない。

それなのに、政治も世相も経済も、何もかもが混沌としたこんなご時勢であるというのに、私は優雅に絵画に打ち込んでいたのだから。私は、親子ほども年の離れた粹兄さんに、家業の一切合切を任せきりにして甘えていた。自分の好きな美術の道に没入する、まさに絵に描いたような道楽ばかり息子だったのだ。

芸術学校入学後、私のばかは、更に拍車がかかった。盆や正月もとんぼ返りする有様で、挨拶に訪れた親戚の横をかいくぐって学校に戻る私に、皆、呆れ返って首をふっていた。彼らからすれば、戦争特需の波に乗り、事業を着々と広大させていく兄の商魂たくましさを見習え、と小言のひとつも言いたいところだっただろう。だが美術の面白さに存分にひたれる環境を手に入れた私にとっては、そんな親戚連中の思惑なんぞ、まさにどこ吹く風だった。

(続きは製品版でお楽しみください)

イラストも人気高し！

文画両刀作家ここに降臨

七ツ枝 葉

美しい腹筋までを書き込んだ男性のイラストなどは特に秀逸。文章のほうも読みやすくありながら碎けすぎない文体。現在なろうに連載中の『BACKWORKER'S ROCK 3rd MEMENTO EATER』は、そんな彼女の魅力両方が存分に味

わえるとあって人気が高い。今回が電子書籍デビューということもあり、この対談も初々しくて可愛かったのです♡



対談オトナ純愛

七ツ枝 葉×アザトー

アザトー「『オトナ純愛企画』は、参加してみてどうでしたか？」

セツ枝「まず、お話頂いた時、まさか私にお声かけしてくださると思わなかったの、びっくりしました。電子書籍になるということで、これまでのようにただ投稿サイトに載せるのとは訳が違いますし、少し緊張しましたが、これは良い機会だと思い、参加させて頂きました。初めての恋愛小説だったのですが、執筆中はかなり楽しんでました。自分としてはいい経験をさせて頂いたので、参加してよかったと思います。」

アザトー「今回のお話をざっくりと説明していただいてもいいですか？」

セツ枝「えーと、31歳の女性が主人公なんですが、自分の生き方に行き詰まっている状態です。恋愛では不倫してるし、仕事ではキャリアアップが難しい。イライラをぶつけられる相手は幼なじみの男性だけ。その幼なじみは着実にキャリアを積んでいる。差を感じて焦りを覚えて…という感じで話は進みます。自分の幸せのために何をすればよかったのか、分からない状況の彼女が、ちょっとジタバタするお話…でしょうか。」

アザトー「等身大の女性、っていう感じ？」

セツ枝「ちょっと自分の実体験を元にしてはいる部分はありますw不倫ではないですよ！」

アザトー「そこもまた、見どころということでの」

セツ枝「ちゃんと等身大を描けていればいいんですけど…」

アザトー「普段はどんなものを書いているのか、ご紹介ください」

セツ枝「作風のほとんどはファンタジーです。魔法とかドラゴンとか、いわゆる王道ですね。ですけど、今、某小説投稿サイトではSFアクションものをシリーズで続けています。こちらも主体は王道で、コンビものですね。」

アザトー「かっこいいやつなの」

セツ枝「あ、ありがとうございます(//∩//)」

アザトー「そういう普段の作品とは違って、苦勞したところなどはありますか？」

セツ枝「やっぱり、リアリティだと思います。ファンタジーやSFは、ある程度創作してもいいんですけど、今回は現代の恋愛ものですから、共感して頂くためのリアリティが必要だと思いました。なかなかこれが難しかったかと思います。」

アザトー「なるほど、現代物ゆえ、ですな」

セツ枝「はい。現代物は、難しいです。」

アザトー「今回、表紙の方はご自分で？」

セツ枝「はい。表紙は自分で用意してもよい、とのことでしたので、せっかくの機会ですから、描かせて頂くことにしました。」

アザトー「実は、セツ枝さんのイラスト、好き〜」

セツ枝「ありがとうございます(//∩//) 嬉しいですー☆」

アザトー「あれは、独学ですか？」

セツ枝「独学とっていいものなのでしょうか。どの絵描きさんとも共通すると思いますが、絵を描き始めた頃は、好きなマンガ家さんの絵柄を真似てました。それから、描き続けている間にも、いろんな絵柄に影響を受けて、紆余曲折しつつ、今の絵柄に行き着きました。」

アザトー「描くのが得意、もしくは好きなモチーフは？」

セツ枝「ひとつ挙げるとすれば、デフォルメイラストでしょうか。割と得意です。あっ、あと男の腹筋ですかねwww 近頃は腹筋描きとして認識されているみたいですよw」

アザトー「確かに、見事な腹筋描きですな←認定」

セツ枝「認定されました(//∩//)」

アザトー「こんごまた、このような企画があったら参加したいですか？」

セツ枝「そうですね。参加出来そうな題材の企画があれば、是非参加させ

て頂きたいと思います。」

アザトー「ぜひ、参加の方向で！腹筋絡めるから(にやり)」

セツ枝「ああ、それは参加せざるを得ませんw」

アザトー「本日はお時間、ありがとうございました♡」

まちあい（立ち読み版）

【著・イラスト】セツ枝 葉

「アキ、髪洗って」

ガラス張りのドアを押して中に入るなり、私はそう言った。

時刻は午後七時半。苛立つ私が飛び込んだのは、小さな美容室だ。

内装は、木目調をベースにしたインテリアで統一された、落ち着きがあってくつろぎやすい雰囲気のお店だ。スタイリングチェアは二つしかない。

閉店時間はとっくに過ぎていて、店内はがらんとしている。それでも私はかまわず、待合スペースのソファにバッグを放り投げ、その横に勢いよく座った。

皮製の柔らかいソファクッションに、私のお尻が沈む。

「お疲れハル。また機嫌が悪いね」

店内の奥から、背が高く、癖毛の男がのそりとやって来た。この美容室の店長で、幼なじみのアキだ。温和な顔立ちに太い黒縁フレームの眼鏡をかけ、百八十センチの長身をリネンのシャツとデニムパンツで包んでいる。いつもと変わらないスタイルだ。

「またって何よ。いつも不機嫌みたいに言わないでくれる」

「閉店時間を過ぎてるのに、髪を洗えと言ってくるのは、だいたい機嫌が悪い時だろ？」

笑うアキは、長い人差し指で、眉間をつついた。

「ここにしわが寄ってるぞ。ハルはちょっと性格キツそうに見えるから、ますます近寄りたいたい空気が出てる」

「ああそう、そうだね、そのとおり。機嫌悪いよ。性格もキツい。認めるから洗って」

「はいはい。じゃ、座ってなよ」

アキは苦笑して洗髪台を指差すと、自分は入り口のガラスドアに向かった。

私が洗髪チェアに座る間に、アキはドアと窓のブラインドを降ろした。鍵は掛けなかったけれど、そうしていれば誰も入ってこない。そもそも外側のドアノブには「CLOSE」のプレートが掲げられているのだから、もう閉店なのだという事は誰の目にも明らかだ。それを承知で、私はいつも堂々と中に入る。

そんな私に慣れたアキは、当たり前のように迎え入れてくれるのだった。

アキがこちらにやって来る。どんな食生活をすれば、あんな細長い体型を維持出来るのだろう。肉もお酒も好きなくせに、まったく太る様子がないのは、女として腹立たしい。私は油断すると、すぐに体型に現れてしまうから。

座って待っていた私にアキは、下半身を冷やさないためのブランケットを渡してくれた。

「倒すよ」

スイッチが入ってモーター音が鳴り、チェアはゆっくりと倒れる。その間アキは、私の髪がチェアと洗面台に挟まれないよう、持っていてくれた。

チェアが倒れきると、もうちょっと上に、と言われたので、身体を少しずらす。首が落ち着いた。

ガーゼが顔に掛けられ、私は目を閉じる。頭上からシャワーの音が聞こえ、水が雨のように流れ出る。洗髪台に跳ねる水が、徐々に温水に変わっていくのが感じられた。

水温がちょうどいいくらいになって、ようやく、

「じゃあ、洗ってくね」

アキは私の髪にシャワーを当てた。

ぬる過ぎず、熱過ぎることもない、心地良い温かさのお湯が、髪をまんべんなく濡らしていく。

アキの手が頭と髪を撫で始め、シャンプーが豊かな泡を立てた。甘酸っぱいりんごの香りのシャンプーだ。

ガーゼの下で目を閉じる私の耳には、髪が洗われるわしゃわしゃいう音だけが聞こえている。髪を洗ってもらっている間は、頭の中がからっぽになって、余計なことはすべて閉め出すことができた。

こうしてアキに洗髪してもらおうと、それまでに溜まった嫌な思いまでも、洗い流されるような気がする。

他の美容師ではこうはならない。アキが洗う時だけだ。

「ハル、ずいぶん髪伸びたね。まだ切らない？」

上からアキの声が降ってくる。

「あと一センチくらい伸びたら、リナさんをお願いする」

「まだ俺に切らせてくれないんだ」

私はアキに、ヘアカットを頼んだことは一度もない。カットしてもらった美容師は、他にお気に入りの人がいるのだ。

「カットはリナさんって決めてるの。イメージどおりに切ってくれるからね」

「俺にも切らせてよ。ハルには洗髪しかしたことないんだぞ」

「だめ。男の美容師に切ってもらって、うまくいった試しがない。男は自分の好みを反映させるからね」

「偏見じゃん。プロなんだからそんなことしないよ。俺、結構腕がいいって評判なんだけど」

「だめ」

アキにしてもらうのは洗髪だけ。嫌なことを忘れるための、ストレス解消法なのだ。

私がアキの美容室（{COCON|ココン}）を訪ねるのは、たいてい仕事帰

りだ。

私が勤める輸入雑貨ショップの閉店時間は、午後七時。〈COCON〉の閉店時間も、午後七時。

アキに髪を洗ってもらいたくなかった時は、事前に一本電話を入れる。

「いいよ。待ってるからおいで」

アキの返事は、いつもこうだ。私がストレス発散のために洗髪してもらっていることを、とっくに分かっているから、あれこれ理由を聞いたりしない。

私の職場とアキの美容室は、同じ町内にある。でも、閉店後の締めや帰り支度、移動時間を含めれば、〈COCON〉へ行くには最短でも三十分以上はかかる。それでもアキは、私が行くまで待っていてくれるのだった。

〈COCON〉は個人経営の小さな店だから、最後のお客さんのスタイリングが済めば、その日はもう営業終了。さっさと帰ることができる。アキは私に、「営業時間外だから、休みの日にでも出直せ」と言えばいいのに、絶対に言わない。たとえ残業で遅くなっても、「今日は行けなくなった」と連絡するまで、ずっと待っていてくれるのだ。

泡を丁寧にお湯で流し、髪を絞って水気を切る。頭にタオルを巻かれ、顔のガーゼが取られた。

「はい、お疲れ。あっちに移動して」

指定されたスタイリングチェアに座ると、今度はドライヤーでの乾燥が始まる。乾かす作業も、アキはとても丁寧だった。

乾ききった髪がブラッシングされると、自分で洗ったのでは得られないような艶が、髪に生まれる。いったいどんな魔法を使えば、こんなに綺麗な髪になるんだろう。

そのあとはマッサージだ。頭皮と首、肩から背中。アキの大きな手が、凝りをほぐしていく。洗髪後のこのマッサージも、ストレス発散になるのでお気に入りだ。

「あー、そこ、もうちょっとぐりぐりしてくんない？」

「ここ？」

「もうちょっと下。首の付け根あたり」

「ここ？」

「そうそうそう、そこ。あー、いいね」

「おばさんくさいなあ」

「うるさい。どうせおばさんだよ」

「三十歳はまだおばさんじゃないだろ」

「おばさんなの、世間からしたら。十代二十代から見れば、間違いなくおばさん」

ほんの一歳違うだけでも、世間の認識はがらりと変わる。二十九歳と三十歳

は、全然違う。男はまだいい。三十四十が働き盛りだというくらいだから。でも、女はそうはいかない。

三十代になると、途端に一日一日の流れる時間が、急に早くなる。二十代の頃のように、のんびりまったり過ごしていると、あっという間に四十代だ。

アラサー女に、時間の余裕などない。

(続きは製品版でお楽しみください)

多岐ジャンル書き分ける

間違いのないプロの技

栗生慧

紙書籍、電子書籍、舞台を選ばずに多彩な作品を生み出し続ける栗生慧さん。その作品ジャンルも多彩であり、重厚な文章から軽妙な筆まで、その時々に応じて各々の題材にふさわしい文体を使いこなす文章力の高さで読者からの信頼も高い。今回の作品は重厚を超えた濃厚系。オトナの純愛ならではの切ない胸のうちのちをたっぷりと楽しめる。



対談オトナ純愛

栗生慧×アザトー

アザトー「はい、ではよろしくお願ひしますの」

あおさと「よろしくお願ひします！」

アザトー「まず最初に、これはみんなに聞ひてるんだけど、『オトナ純愛』は参加して見てどうでした？」

あおさと「結構難ひしい題材だな、と思ひました。」

アザトー「『オトナ』と『純愛』ですもんね」

あおさと「そうなんですよ。行為そのものが純愛なのか、心理自体の純愛なのか、迷ひましたが、心理の方を優先させました。どこまでがオトナであればいいのか、年齢なのか、心理状態なのか、行為なのか。そちらも上記と同じですね。」

アザトー「なるほど、だから心理描写が濃厚だったんですね」

あおさと「そうなりますね。」

アザトー「書く際に特に気を使つたことはありますか」

あおさと「主人公の気持ちがぶれないように、過去の彼と現在の『あなた』に対する気持ちの重さに気をつけました。過去の彼とは成り行きで同棲し

たけれど、『あなた』に対しては想いの重さがかなり違うことを意識しましたね。」

アザヒ「小道具としてでてくるソファ、あれがすごく暗示的で好きなんですよね。あれにまさしくその辺が書き込まれている感じ」

あおさと「ありがとうございます。ソファは彼の愛着の見せ方と主人公の彼に対する思い切りを表現してみました。」

アザヒ「今回、文体もかなりオトナっばいですよ、これは意識的に？」

あおさと「文体も意識しましたね。でないと、最初と最後の主人公の気持ち切り切れないと思ったからです。」

アザヒ「戦略ですか」

あおさと「そうとも言えますね (^ω^) 伏線ですね。」

アザヒ「あ、そっちな」

あおさと「彼はあなたへの想いの伏線です。」

アザヒ「あおさんは特に今回の参加者の中で一番出版経験がある方なので、そのあたりも伺っていいですか？」

あおさと「はい、どうぞ。」

アザヒ「都合悪いことは、咳払いでもしてくださいね」

あおさと「はい (^ω^)」

アザヒ「まずは、代表作を教えてください」

あおさと「やはり、文庫単行本で出した、『屍鬼祓師』です。」

アザヒ「今出してる、晶良ちゃんのやつ？」

あおさと「そうです！晶良のヤツですね。」

アザヒ「あれも、今回のとはずいぶん雰囲気違うよね、幅広いなあ」

あおさと「ありがとうございます。いろんなジャンルに挑戦してみたい年頃なんです。」

アザヒ「やっぱり、幅広く書けるほうが出版では有利ですかね？」

あおさと「有利ですね。出版社によって求められるものが違いますから。」

アザヒ「特に電子出版では、ジャンルが多岐にわたっていますもんね」

あおさと「電子書籍は書かせていただいている出版社様が、かなり自由にさせてくださってるので。」

アザヒ「ほう」

あおさと「出版社によって色が違いますが、なんでもいいよ、というところもあるのです。」

アザヒ「でも、エロ怖なんかはある程度の形式もとめられますしね。やはり幅広くかけるに越したことはなさそう」

あおさと「あれは私が提案したんですよ。だから、かなり制約が付いてしまいました。結構難しいジャンルのようになかなか書き手が見つかりませ

ん。ホラーとエロは実は結構求められてるジャンルなので、この際一緒にしてみました。」

アザトー「商業だとクオリティも求められますからね。そのあたりの難しさもあるでしょうね」

あおさと「そうですね。どういうものにするかは書き手の自由ですが、あくまで、エロなのでエロ寄りでという制約やクオリティが必要ですね。」

アザトー「今回の『好きだから別れます』を例にとると、商業的なクオリティの最低ラインとはどこだと考えますか？」

あおさと「構成と誤字脱字の少なさです。」

アザトー「なるほど、それって読みやすさの基本ですね」

あおさと「短いですから、構成のクオリティがより求められます。」

アザトー「長編のほうが書きやすい？」

あおさと「エピソードの数によりますね。」

アザトー「エピソードですか」

あおさと「エピソードが少ないのに、だらだら書くと読者が飽きますから。」

アザトー「あ〜、たしかに」

あおさと「たとえば、3万字書かないといけないのにエピソードが二つしか組んでいなかったらかなり苦しいですよ。」

アザトー「はい」

あおさと「反対に、エピソードが10以上あるのに文字数が3万字だと、お話がジェットコースターになります。バランスが大事ですね。」

アザトー「書くのが得意な長さとか、ありますか？」

あおさと「特にありません。あまり考えたことがないですが、電子書籍の場合は、売りやすさ重視で、2万字から3万字を意識しています。今回は短すぎましたが、ゲフゲフ」

アザトー「咳払いだ!!!」

あおさと「ここだけはゲフゲフ」

アザトー「ということで、そろそろまとめますね〜」

あおさと「はい」

アザトー「今回のような企画がまたあったら、参加したいですか？」

あおさと「その時の状況によります。3万字ですと他にも仕事が重なった時に辛いですから。短くて良いのでしたら、また参加したいですね。」

アザトー「なるほど、他のお仕事しだいということですね」

あおさと「そうですー」

アザトー「また、お声はかけますね〜」

あおさと「ありがとうございます！楽しみにしています！」

アザトー「さて、本日はお時間ありがとうございました。これでしめたいと思います」

あおさとる「ありがとうございます！ お疲れ様でした！」

好きだから別れます（立ち読み版）

【著】 粟生慧

「別れましょ」

バーのカウンターで、あなたはハイボールをわたしはマティーニを飲みながら、わたしはあなたに告げた。

あなたはまるで水鉄砲を食らったような顔をしていたけれど、どうしてなんて聞かなかった。

それはわかりきったことで、きっと、何もなければあなたはわたしを引き留めていたかもしれない。

物わかりのいいあなたが憎らしいけれど、好きだから別れます。

あなたに出会ったのはいくつのときだったかしら。

わたしはもう三十路を過ぎていて、色気なんて縁がなくて……。

年下のあなたが係長として就任してきたとき、わたしはあなたのことを何とも思っていなかった。

たぶんあなたもわたしの存在に気づきもしなかったと思う。

わたしには十年付き合ってる彼がいて、あなたは結婚していたんだから。

当時、わたしは彼氏と同棲していた。

結婚しないまま、だらだらと関係が続けている間に、なんだか疑似家庭のようなものができあがっていた。

きっかけは何だったかしら。

交通費とか家賃とかそんな他愛ない理由だった。

若かったから、まだわたし達の未来を信じていたから。

まるでままごとのような生活が始まって、わたしも彼もとても幸せだった気がするわ。

マンションの下には公園があって、春にはサクラが咲いたわね。

休みの日にわたし達そこへ行って、ピクニックをした。

サクラの花びらが雪のように散り舞って、花吹雪の中の彼が笑っていた気がする。

遠い記憶に感じるわ。

そんな笑顔はだんだんと少なくなっていったから。

わたしはまだ若かった。

そして勘違いしていたの。

彼と暮らすこの空間にもう一人いてもおかしくないって。

夏に二人で海に行ったことがあった。

彼が顔を真っ赤にして空気を浮き輪に送り込む姿を見て、わたし、大笑いしたわね。

沈んでいく夕日がわたし達の距離を縮めてくれたように感じていた。

彼に寄り添っているのが当たり前のように感じていたのよ。そろそろリビングにソファを買おうよ、と言ったわね。

黒い革張りのフッカーとしたソファを見つけたとき、わたし達の生活にぴったりなものだって喜んだ。

革張りのソファを大事にする彼が、とてもチャーミングだった。

乾燥したらいけないって、週に一回はワックスを塗ってた気がする。

それを見たわたしが大切にすぎなんじゃないって笑ったら、高かったんだからって言い訳してた。

傷なんてつけようものなら、とても不機嫌になったわね。

そんなあなたに気を遣って、彼がいないときはわたしは床に座ってたのよ。

革の冷たい感触を頬に感じながら、もたれかかっていた。

その冷たさが心地いいと思えたのね。

(続きは製品版でお楽しみください)

昼エロの女王降臨！

繊細に描かれる男と女

GALA

本作で商業デビューを果たすことになるGALAさん。なろうでの代表作『冷炎』は、恋に惑う大人女性の心理を巧みに描いて人気が高い。まさに今回の『オトナ純愛』というコンセプトにはぴったりの逸材だ。

そんな彼女が初時代劇に挑戦！ ということで今回の対談はこの作品について突っ込んで聞いてみた。



対談オトナ純愛

GALA×アザトー

アザトー「ではよろしくお願ひします〜」

GALA「よろしくお願ひします！」

アザトー「最初に、これはみんなに聞いているんですけど、オトナ純愛企画に参加してみてどうでした？」

GALA「けっこう話もすぐに浮かんできたので、楽しく書きました。」

アザトー「楽しかったなら何より♡ 今回のお話がどんな感じか、さわりだけ聞きますね」

GALA「はい」

アザトー「時代はいつごろのお話ですか？」

GALA「江戸時代初期あたりを想定してます。」

アザトー「おお、時代物ですな」

GALA「現代ものしか書いたことなくて、色々調べました〜」

アザトー「時代物初挑戦！ 現代モノとはやはり、だいぶ違いましたか？」

GALA「そうですね。一番の違いは言葉ですね。」

アザヒ「なるほど。例えば？」

GALA「一人称も今と違いますしね。僕とか私とか言わないでしょう。」

アザヒ「あ、拙者とか、わっちとか言う〜」

GALA「武士ではないし、あまりかたっ苦しくなると読みづらいかと思い、そこら辺はちょっとアレンジしてます。あと現代になって名前が変わったものもあるので、古名調べたり。」

アザヒ「たぶん、道具なんかも現代とは違いますもんね」

GALA「農民なので農具とか…調べてはいてもほんとにこれでいいのか！？とドキドキしてます。」

アザヒ「農具とか、現代ではピンとこないもの多いし！」

GALA「あ、でもそんな難しいのは出てきません（笑）あと、一般の農村のものが、どの程度子作りの知識があるかとかもなかなかわかりませんでしたね。」

アザヒ「子作り……エロあり？」

GALA「はい。で、そのことでRの表現、程度について夕霧さんに少しお話を伺って…書き直しになったらどうしよう、と思ったんですが、大丈夫だったのでホッとしました」

アザヒ「R表現って加減が難しいですよ」

GALA「そうですね。加減というか、言葉の選び方に苦労しました。一つのことを指すにしても統一したほうがいいのか、その都度変えたほうがいいのか、とか。」

アザヒ「あまり同じにすると単調になっちゃいますもんね」

GALA「その点では…まあなんとか、お楽しみいただけるように書けたと思います。」

アザヒ「アザヒ一なんかはエロ書くはずなのに、エロなくて怒られるですよ」

GALA「アザさんほんとはエロ苦手ってこの前仰ってましたね。」

アザヒ「はい。エロくないエロ作家の称号もらった〜」

GALA「希少な称号w」

アザヒ「質問切り替えまして」

GALA「私、最初はエロ書きになるつもりはなかったんですよー！」

アザヒ「あ。いや、エロ書きになるつもりがなかった、をじっくり！！」

GALA「あはは、そうですか。処女作は青春物語のはずだったのに、気付いたらR物になってました。」

アザヒ「いまや読者さんはがーらさんの名前を見るとある程度エロを期待しちゃうと思うですよ」

GALA「みたいですね。短編にはなかなか入れられないですが。ムーンとな

ろうじゃ反応違いますしね。」

アザヒ「うん、ムーン作家さんのイメージ強いです」

GALA「今やエロなしの恋愛ものは書けなくなりました…」

アザヒ「でも人間というものがしっかり書かれているからこそそのエロだから、好きですけどね」

GALA「ありがとうございます。それは大事ですから。人格のないエロは書いても面白くないですし。」

アザヒ「R以外で挑戦してみたいジャンルとか、ありますか？」

GALA「時代物が面白いな、と思ってたので今回書いたんですが、ちょっと大作を考えてます。取材行きたいんだけどなかなか時間が取れなくてまだ着手してませんが。」

(ぼそりと)

GALA「それでもエロは外せない…」

アザヒ「外せないんかいwww」

GALA「当然ですwww」

アザヒ「さすがや」

GALA「男と女が登場する限り…w」

アザヒ「あ、それが揃うとはじまっちゃうよね/////」

GALA「BLとかも人気ありますが、書けそうにないですね。設定としては禁忌ありきなもので、どこまで出来るかわからない。」

アザヒ「BLは、難しいですよ～」

GALA「BLはファンタジーですから。」

アザヒ「しかし、大作ということで、ファンは全裸待機必須ですな」

GALA「大体長編書きなんで…ただ歴史とか一番苦手なはずだったのになぜ、と。ペラくならないように取材頑張らなくちゃ…」

アザヒ「そろそろまとめていきますね～」

GALA「はいー」

アザヒ「今後、こういう企画があったら、また参加したいですか？」

GALA「はい、是非参加したいです。今回もお誘い頂いて色々勉強になりましたし、新しい世界が開けました。」

アザヒ「新しい世界……………意味深？」

GALA「電子書籍自体初めてだったし、時代物も書けたし。子袋、なんて初めて書きましたよw」

アザヒ「やっぱり意味深～」

GALA「ふふふ」

アザヒ「では時間も長くなりましたのでこの辺で。本日はお時間ありがとうございました～」

GALA「ありがとうございます！」

時代・歴史小説を得意とする

今企画屈指の本格派

鋼雅 暁

鋼雅さんは電子書籍を中心に活躍する実力派。主に歴史・時代小説を得意としており、今回の作品である『恋御籤』も、硬質な時代小説風の造りに恋愛要素をうまく配したほろ苦い読感が魅力だ。

時代小説のみならず執筆ジャンルは多岐にわたっているが、いずれも確かな文章力に裏打ちされたものばかり。

今回の対談にはそんな鋼雅さんをお呼びしました☆



対談オトナ純愛

鋼雅 暁×アザトー

アザトー 「今回は対談ということで、いきなりズバリ、オトナ純愛企画について伺っ しまおうと思います。参加してみていかがでしたか？」

こうが 「たのしかったです！」

アザトー 「こうがさんにとっての『オトナ純愛』の解釈をお聞きします。まず、どこからがオトナだと思いますか？」

こうが 「実はそのあたり、あんまり考えてないです(笑)。変な話、コドモでも『オトナだねえ』って恋をすることもあれば、いい歳のおとなが『コドモじゃないんだから……』って恋もするし。なので今回は、その『中間』を選びました」

アザトー 「なるほど、年齢にこだわらない『オトナ』の概念ですね。では次に『純愛』を。こうがさんの思う『純愛』の形を語ってください」

こうが 「『肉欲』の薄い『愛』かな、と思っています。肉体的な繋がりより、想うキモチの方が強そうな……そんな形かなあと……」

アザトー 「なるほど、綺麗系の純愛ですね、実は好物です」

こうが 「お仲間ですねえ！ 実際書くのは、難しかったです……」

アザトー 「どのあたりがむずかしかったですか？」

こうが 「そもそも、恋愛小説をほとんど書いたことがないので、『男女の心の動きを中心に据えてストーリー展開を考える』ってところが、大変でした。」

アザトー 「ああ、あまり恋愛小説のイメージないですものね。でも、普段のお付き合いから、『純愛を書いて頂くならこうがさん！』って、心に決めていたのですよ」

こうが 「ほえええ、そうだったのですか！ びっくりー！！」

アザトー 「はい、時々垣間見える恋愛観のようなものがとても綺麗な人なので……追い詰めたらいいもの書くぞ、と思いました(にやり)」

こうが 「……それで仕上がったのがアレなのですが……」

アザトー 「甘すぎず、ビターですよ。オトナの読み物なのだから、良策だと思いますよ」

こうが 「キャラが『片思いで良い』って一歩引くというか、押しが弱いというか……」

アザトー 「こうがさんそのものっばいかも(にやり)」

こうが 「うっ！（そっと目をそらす）」

アザトー 「実際、自分が恋愛するとしたらオトナとコドモ、どちらの恋愛をしそうですか？」

こうが 「えーっと『片思い』のベテランなので、ある意味、今回の主人公はわたしの分身です(てへっ★) でも『この人！』って決めたら、ハンコ捺した婚姻届もって押しかけるとします。そう言うところは子供！」

アザトー 「なんか、それだけで一本書けそうですねw」

アザトー 「今回の企画は図らずも作家の恋愛観が見えてしまいますねー。他の作家さんたちの作品はいかがでした？お気に入りのものはありましたか？」

こうが 「全部読ませていただいていますけど、アラサー独身女子が『ああっ！耳が痛いわっ！』って思うセリフや場面が必ずありますね(笑)」

アザトー 「ありますねー」

こうが 「アラサー独身あるある ってハッシュタグつけて叫ぼうかと思ったくらい(笑)」

アザトー 「あ、それ宣伝にいいかもw さて、そろそろまとめに行きましょうか」

こうが 「はい！」

アザトー 「こうがさんの作品は恋愛要素を含みつつも構成等きちんと時代小説で、私は好きなのですが、これはどの年代の読者にオススメしたいですか？」

こうが 「『只今片思い中の、若い人』にお届けしたいな、と……」

アザトー 「いいですね〜。甘酸っぱい想いがリンクしそう♡」

こうが 「実はこのお話、続編考えてマス」

アザトー 「おお！ これはおいしい情報！！ 続編の報を待て、ですね♡」

こうが 「はい♡」

アザトー 「では、続編期待してます。本日はお時間ありがとうございました〜」

こうが 「こちらこそ、ありがとうございました！」

恋御籤（立ち読み版）

【著】鋼雅 暁 【表紙】スタジオ飄

壱

柳井小治郎が日本橋に店舗を構える呉服屋の天店・三好屋本店に泊まり込んで、何日になっただろうか。

帳簿を片手に、品物の個数や売り上げの数があるか、品物の品質に問題がないか等の「総点検」を終わらせるのに数日を要した。

点検が終わったので、責任者である小治郎が一人残って分厚い報告書を認めた。

それを懐に仕舞った小治郎は、奥へと挨拶に向向いた。

「三好屋どの、今月の点検、無事に終わりました」

部屋の奥に作りつけられた棚に向かっていた小柄な男が、くるりと振り返った。

「おお、柳井さま」

まことにご苦労様にごさいます、と、若い小治郎に向かってきちんと挨拶してくれるこの初老の男が、三好屋の主・四代目伊佐由だ。

「こちらが今回の報告書です」

ずっと差し出した書状を、伊佐由は丁寧に押し頂いた。商人としては致命的に口数の少ない男だが、動きの一つ一つに想いが溢れているため、まったく不快ではない。

「不審な金子の流れはなくなりましたが、いくつか質が悪いものが混じっているようです」

「そうですか……」

「天下の三好屋さんが粗悪な品を売ったとなったら、評判に関わりましょう。明日からは、粗悪な品の出所を密かに確認します」

よろしく願いいたします、と、主がまた、頭を下げた。

二、三、会話をして退出しようとしたところへ、小僧のひとりがやってきた。

「柳井さま、伊豆屋さんからの文です」

「はて？」

受け取って披いてみると、見慣れた女文字だ。

『今日から毎日、八つになったらいつもの茶屋にてお待ちしております』

「いかん！ 今、何時ですか？」

「まだ八つの鐘はきいておりませんが、そろそろでしょう」

小治郎は、挨拶もそこそこに、店の階段下の小部屋へ向かった。

この小部屋は通称「支度部屋」、仮眠をとったり着替えたり、食事をとったり

する部屋だ。

いつもは用心棒仲間の男が数人いるのだが、今日は誰もいない。皆、一足先に自分の家へと戻ったのだ。

「やれやれ。いつもはむさ苦しいばかりの支度部屋だが、さすがに一人だと寂しいな」

小治郎はそこで、商家の手代風に使っていた鬘や着物を、本来の武家のそれへと直してもらった。それらを手伝ってくれるのは奥向きの一切を任されている女中頭のおけいだ。

彼女は四十に手が届くかどうかという年齢で、若いころは結構な美人だったであろう顔立ちだ。

「柳井さま、お疲れ様でございました」

「なんの」

「ささ、お茶をご用意いたしました」

おけいが差し出す茶を飲み、腹の底から太い息を吐き出した小治郎は、ようやく笑みを浮かべた。

おけいは、幼いころから大店で奉公しているためか万事心得ている有能な女中である。動きに一切の無駄がなく、何事も手際よくやってくれる。

「柳井さま、半纏はこちらに下さいまし。洗っておきます。それから袴の裾が少しほつれておりましたので、直しておきました」

「これはかたじけない」

「伊豆屋さんの末のお嬢様と、これからお会いになられるのでしょうか？」

「そうです。よく御存知ですね」

「はい。耳がはやいのです……と申し上げたいところですが、柳井さまへの文を千草さまから託したのは私と小僧の市蔵さんです」

「なんと！ そうでしたか」

珍しく、おけいが手を止めた。

「おけいさん？ どうしました」

「先ほど、千草さまを表でお見かけいたしました。何やら深刻そうなお顔付きでしたのが気にかかります。柳井さま、千草さまを助けて差し上げてくださいませ」

いつになく真剣な表情で言う。

「ああ、そうか。おけいさんは、三好屋に来る前は伊豆屋の奥で奉公していたのですか」

「はい。長女の早苗さまがこちらの若旦那さまに嫁ぐ際に、一緒に参りました」

十になるかならぬかのころから伊豆屋の奥で奉公していたのが、おけいだ。当然、伊豆屋の四姉妹のことも知っている。

「おけいさん。俺がどの程度、千草の力になれるかはわからぬが、出来るだけ

やってみよう。約束する」

「よろしく願いいたします」

おけいが、深々と腰を折った。

「あ、柳井さま。お髭もあたっておきましょう」

「む」

顎をなでれば、ぞろりと髭が伸びている。

「これではいかぬか？」

「若い女は、無精髭は嫌いますからね。さ、お座りください」

小治郎は、「小」という字が名前に入っている。だが、親につけられた名に反して背丈は六尺に届くほどにすくすく育った。

しかも、身体を動かすことが好きなため、剣術も弓も得意で筋肉もしっかりついている。そんな小治郎をあっさり抑え込んだおけいが、小治郎を小奇麗にしていく。

「さ、できました。はい、男ぶりがあがりましたよ。いってらっしゃいませ」

(続きは製品版でお楽しみください)

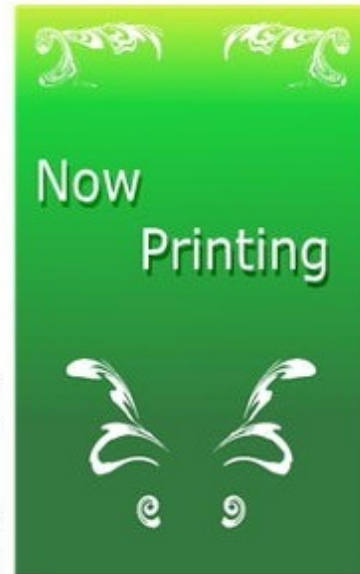
迫真の描写を可能にする

綿密にして精緻な筆

紅月 実

企画主のアザトー氏自らが発掘してきた逸材。少し重めの文体が心地よい本格ハイファンタジー書きだ。

対談実施時にはちょうどオトナ純愛企画用の草稿を執筆中ということで、作品情報を先取りしつつサディスティックに突っ込んでお話を伺ってみたぞ。



対談オトナ純愛

紅月 実×アザトー

アザトー「よろしくお願いします～」

紅月「よろしくお願いします」

アザトー「最初に、定型質問を。オトナ純愛に参加してみてどうでしたか？」

紅月「楽しいけど難しいのが本音ですね。テーマに沿って書くのに慣れていないので、まずそこから（笑）」

アザトー「今回はオトナ純愛ということで、オトナと純愛のバランスは難しくありませんでしたか？」

紅月「難しいです！（力説）年齢指定のない純粋な愛情はすごく敷居が高かったんですよ。でも、ふっと浮かんだネタを膨らませたら、純愛っぽいものになりそうだ、と。」

アザトー「そういう閃きって大事ですよ。書いててそういう閃きが良くある方ですか？」

紅月「いつも閃きだけで書きます。ある程度骨子になるエピソードを決めたら、間を繋げるのに苦労するタイプです。」

アザヒ「描写力が高いからこそその荒技ですな」

紅月「嬉しゅうございます♪」

アザヒ「特に迫力の解体シーンなどで人気が高いのは知っているんですが、今回もやはり描写で魅せるシーンがあるんですか？」

紅月「本人的には解体描写が受け入れられるとは全くこれっぽっちも考えていなかったの、どこが受けるのかさっぱり……（汗）。ただ、短編なので、ラストでぐいっと盛り上げるつもりです！」

アザヒ「おお！ ラストでぐいっと！ 期待大です！！ たぶん読者さんは長編のイメージが強いと思うのですが、今回は少し短くありませんでしたか？」

紅月「え、そうですか？ 実際には長編より中短編のほうが作品数多いんですよ。10万字超えの作品は一作だけです（苦笑）。それに中短編とほぼ同数の短編もちらちらと存在しますです。」

アザヒ「ということは、今回くらいの長さはむしろかきやすい？」

紅月「それがまた難しいところでして。10万字が長編の基準の一つですが、中短編は5万字前後、短編は掌編程度の5千字前後が書きやすい範囲らしいと今回のことで知りました！」

アザヒ「少し苦労した感じですか（にやり）」

紅月「現在も四苦八苦しております……。初挑戦の現代？ ものなので資料を漁っていたら中古車情報にまで及んでしまい、どうしてこうなったかと口からタマシイが抜けそうです。ファンタジーや人外の妖は所有してる資料の目次が脳内に蓄積されてますから、その確認をするだけで済みますの♪」

アザヒ「人外！ どのあたりの人外が好きですか？（興奮）」

紅月「ソコかw 竜は……逆ハー作りたいくらい好きですよ。ケモミミより竜だ、竜！ 自分的三大バイブルにも古今東西のドラゴンを集めた資料本が名を連ねています！」

アザヒ「ウロコ系！！ しかもハーレム！ 書いて！！」

紅月「ちょ、ちょwww 盛大に脱線して宇宙に飛び出してるーwww」

アザヒ「え～、こほん（正気を取り戻した）。しめに行きたいと思います。今回のような企画、またあれば参加してみたいですか？」

紅月「なんてマゾい質問を……！ ふつつか者ですが、ぜひ参加させてくださいませ！」

アザヒ「もちろんです！ 本日はお時間ありがとうございました～」

紅月「こちらこそありがとうございました！」

オトナ純愛企画の企画主！

幅広い作風で知られる怪作家

アザとー

無料小説サイトで短編を中心に活躍するアザとーさんは、書くジャンルを選ばない器用な作家だ。商業デビュー作は男性向けエロ、次作は女性向けエロ、そして今回はエロ抜き人情コメディーと、その筆はまさに変幻自在。にぎやかであげすけな人間性が人をひきつけるのか、企画の中心になることも多い怪人物である。



対談オトナ純愛

アザとー×鋼雅

こうが「オトナ純愛主催者のアザとーさん！ よろしくお願いします！」

アザとー「はい、よろしくおねがいします！！」

こうが「オトナ純愛に参加してみて（企画してみて）どうでしたか??」

アザとー「とても楽しかったです！ 企画としても十分手ごたえがある仕上がりで、満足です」

こうが「そもそも、この企画が持ち上がった経緯や切っ掛けって何だったのですか？」

アザとー「きっかけはツイッター上での友人作家の呟きでした。『自分の作品がきちんと一冊の本になるのか、やってみたい』と……そのいずれもが十分に実力のある人たちだったので、これはおもしろいぞ（にやり）と」

こうが「へえ！ ツイッターがきっかけの企画ってたくさんありますが、それがちゃんと『本』の形までいく企画はまだ少ないような……」

アザとー「そうですね、夕霧文庫さんに企画を持ち込んだとき、私を信頼して企画ごと取り上げてくださったからこそ、この形で企画の完成ができたの

だと、すごく感謝しているんです。」

こうが「ツイッターで最初にアザと一さんのつぶやき見た時に『おもしろーい！』って思ったんですよ。で、最初から結構な人数（しかも豪華メンバー）がそろっていたように見えましたけど、すぐに集まったのですか？」

アザと一「そうですね、KEYさん、GALAさん、七ツ枝さんは一緒に会話していたので最初から参加が決定していたんです。後はここに声をかけて回って参加をおねがいして、集まってもらいました」

こうが「ほええ……アザと一さんの人脈！」

アザと一「顔がデカ……広いですw」

こうが「いやー、顔の広さにびっくりです(笑) 個性豊かな書き手がそろってますよね」

アザと一「はい、今回は特に個性的な方ばかりで、それだけでも読み応えのある企画に仕上がったと思いますよ」

こうが「笑いあり、涙あり……！ そのなかでも、アザと一さんののはコメディですね」

アザと一「はい、今回は日本映画チックなドタバタ人情コメディーに挑戦してみました」

こうが「……ちなみに、今後の『新作』のご予定は？」

アザと一「はい、今後夕霧文庫さんの方から『夢蜘蛛』という、文学風味の作品を、他社さまのほうでも『フランケン少女』のお話を、そしてさらに最新作は現在執筆中です」

こうが「おおおおおおお！！ ハイペースでの執筆ですね。(わたし筆遅いからなあ……見習わなくては)」

アザと一「いや、筆はそんなに早くないんです。家族の協力と、有り余る体力で乗りきってるんですよ」

こうが「なるほど。この仕事、家族の協力必要ですもんね……色んな意味で、一人で作品は作れないですからね……周りに理解者がいたほうが良いですね……」

アザと一「友達が理解者になってくれることも多いですよ。ライバルであり理解者」

こうが「あ、それはよくわかります！ わたしの場合は、先輩方に恵まれました。」

アザと一「人に恵まれるのは、何物にも代えられない財産ですもんな」

こうが「企画しても誰もいなかったら、悲惨ですしね」

アザと一「なので今回の企画は、ある意味あざと一の財産大放出です」

こうが「参加者さんの作品が爆売れしますように(祈)」

アザと一「売れますよ、特に今回はイラストもかける参加者さんが多くて、

作品にぴったり沿った表紙が楽しめる、これだけでも商品価値あります。それに、もちろん文章も濃厚、オトナも満足の読み応えですから」

こうが「読み手も書き手もオトナがターゲットですもんね！」

アザトー「はい、オトナの魅力を、たっぷりお届けです！」

こうが「ここから、『オトナ』世代への電子書籍が、浸透していったらいいなあ、って思います」

アザトー「電子書籍って、最初の手順さえ覚えてしまえば、実は手軽で使い勝手のいい物ですからね。本当はオトナ世代をこそターゲットにしてもいいと思うんですよ」

こうが「そこは、激しく同感です」

アザトー「とりあえず企画の種はまだまだあるので、ご協力いただくこともまだまだあるかも？」

こうが「はい！なんでもやるです！！！」

アザトー「はい、今後もよろしくお願ひしますね」

こうが「こちらこそ、よろしくお願ひします(‘◇’)ゞ」

アザトー「ではこのあたりで、本日はお時間、ありがとうございましたの」

こうが「はいっ！ ありがとうございましたー！楽しかったです♪」

恋味コロッケ（立ち読み版）

【著】アザトー 【表紙イラスト】 FUMITOSHI

『BARアキラ』は、駅前商店街のなかにある。この商店街を抜けた先はマンションやアパートが立ち並ぶ住宅街だ。

芙美子の住むアパートはその住宅街の中にある。そしてこの店は駅からの帰路の途中にあるのだから、つい足しげく立ち寄るハメになる。

ここの『ママ』であるアキラが中学からの古い友人だという気安さもあるが、本当は……ここ数週間、その回数がちょっとだけ増えたのは、まっすぐ家に帰りたくないからなのかもしれない。

深いため息をつきながら木製のドアを押せば、ドアベルがカラリカラリと賑やかに鳴った。

「いらっしゃいま……あら、また来たの？」

カウンターの中にいたアキラは顔を上げるなりそう言った。

芙美子はそんな悪態も気にせずはずかすかとカウンターに歩み寄り、どっかりと椅子に座った。

「私不来ないとこのお店、こんなじゃつぶれちゃうんじゃない？」

確かに客は芙美子一人しかいないのだから、アキラも苦笑するしかない。

「あのねえ、まだ早いからこんなだけど、これでも繁盛しているのよ？」

「どうかしら、オカマバーなんてイロモノだし、アキラちゃんが男の格好で接客したほうが女性のお客さんは増えると思うのよね、あんた、面はいいんだし」

「いまさら男の格好なんていやよ。それに私が男の格好をするなんて言ったら、彼が泣くと思うのよね」

「はいはい、ごちそうさま」

そうしている間に、芙美子の前には水割りのグラスが差し出された。

「いつもどおり、でいいでしょ」

「さすがアキラちゃん」

グラスの冷たさを確かめるように両手で包んで、芙美子とはびきり大きなため息をつく。

「アキラちゃんさあ、結婚とかって考えないの？」

「え～、だって、日本の法律じゃ同性婚できないもん」

「そういう現実的な問題じゃなくて、なんか、こう……」

「はっは～ん、結婚のことでお悩みなよね、聞いてあげるわ」

「そうね、聞いてもらえば少しはすっきりするかなあ」

芙美子はグラスに口をつけて唇を濡らせた。これから話すことのために口のすべりを良くしておきたかったのかもしれない。

「三十をすぎたころから、母が結婚についてしつこく尋ねてくるようになってね」

「ああ、よくある話ね」

「それでもさ、勝手にお見合いの話とか決めてこなくてもいいと思うのよね、毎回断るあたしの身にもなってほしいわ」

「あいかわらずヒロくん一筋なのね」

アキラは小さく微笑んだ。

ヒロ君は芙美子の彼氏で現在は同棲中、これも中学生時代からの付き合いなのだから、何の遠慮も気遣いもない。

「でもヒロ君があんなふうじゃね、お母さんの心配もなんとなくわかるのよ」

「それでもさあ、『男を飼ってる』とか言わなくてもいいと思わない？ そりゃあ……ヒロくんは無職だけどさあ……」

「で、光熱水費も家賃もあんたが面倒見てるんでしょ？ それを『飼ってる』じゃなくてなんていうのよ、『養ってる』とか言われれば納得したの？」

「そういう字面の問題じゃなくてね……」

「フミちゃん、ちょっとだけは現実を見なさい。あたしたちの年を考えれば、結婚なんかとっくにしているもおかしくないのよ。」

「わかってるわよう……」

「こここのところウチにしょっちゅうきているのは、そういう現実から逃げたいからじゃないの？」

「はあ……やっぱりアキラちゃんはごまかせないなあ」

「まあ、あんたのお母さんもきつつい人だからね、もうちょっと優しいやり方もあると思うけど……結局は親としての愛情でしょ？」

「それもわかってるってば……」

芙美子はグラスの中身を一気に煽り、半ばやけくそ気味に声をあげた。

「あ～あ、せめてヒロくんが……」

その言葉をさえぎるようにカラリカラリとドアベルが鳴る。はいつてきたのはおかっぱ頭のさえない男だ。

それでも芙美子は喜びを含んだ驚きの声をあげた。

「ヒロくん！ どうしてここに？」

おかっぱ頭の男はさらに大きな声で喜びを表す。

「少しでもはやく、フミちゃんに知らせたいことがあって、駅まで迎えに行っただけどいつまでも帰ってこないから、ここじゃないかと思って！」

それに煽られて、芙美子の声も大きく跳ね上がった。

「なにになに、どうしたの！」

「いっ！ いいいいいい！ 一次通った！！」

「本当に！？」

このヒロくん、定職にもつかずに何をしているかといえば、漫画家を目指して新人賞に投稿を繰り返している夢追い人なのだ。一次といえば、どこかの新人賞の一次審査のことに決まっている。

そして芙美子との関係はごらんの通り……

「フミちゃん！ 今日の前祝だ！」

「いいわねえ、ここで飲んでいく？」

「うん。ちゃんとお祝いのためにご飯を炊いて、キャベツも刻んでおいた！」

「じゃあ、後は……」

「うん！ 荒木屋のコロッケ、買ってください！」

アキラが苦笑する。

「あんたねえ、前祝におごってやる、くらい言えないの？」

「仕方ないだろ、僕は金がない！」

「そうよ。これから稿料が入ったらいっぱい贅沢させてもらうから、いいの！」

ここまで言われては百戦錬磨のバーのママであるアキラにも反駁の言葉など残されてはいないのだ。

「あんたたち、本当にお似合いよね……」

こうしてOL芙美子と、漫画家志望のヒロ君の物語がここに始まる。

(続きは製品版でお楽しみください)

◇企画主ご挨拶◇

今回は『オトナ純愛』企画対談本を手にとってくださりありがとうございます。
ます。

企画主である私はじめとする参加者一同、こういった企画という形での出版は新しい試みであって右往左往、おろおろばたばた、七転八倒しながら、ようやく企画をひとつのシリーズとして作り上げることができました。

各方面ご協力くださった皆様に感謝いたします。

そしてこの対談本を手にとってくださった皆様へ、これが珠玉の作並ぶこのシリーズの中からお気に入りの一冊を選ぶ手助けとなれば幸いです。

どうかあなたに素敵な物語との出会いがありますように、この祈りをもってあとがきと代えさせていただきます。

アザトー

書名：オトナ純愛 [対談・立ち読み]

著者名：

【著】まりの KEY セツ枝 葉 栗生慧 GALA 綱雅 暁 紅月 実 アザトー

【イラスト】FUMITOSHI まりの KEY セツ枝 葉 コマ

【表紙イラスト】セツ枝 葉

【装丁】スタジオ飄

初版：2015年9月4日

発行所：株式会社グリシーヌ 夕霧文庫

e-mail：yuugiribunko@c-glycine.com

※本書の無断転載・複製等は、著作権法上禁止されております。

※表紙イラスト：© セツ枝 葉